多職種が参画する口腔機能管理

座長　宇佐美雄司†　有 家　巧*

第73回国立病院総合医学会
（2019年11月８日　於　名古屋）

IRYO　Vol. 75　No.　4（317－319）2021

要 旨　いわゆる「口腔ケア」はおよそ20年前に登場し，一般化した概念，用語ではあるが，今では「口腔機能管理」に統合されているものと理解される．そして，口腔機能管理はとくに高齢化社会においては口腔機能の保全を通じて健康寿命の延伸に必須であり，あるいは悪性腫瘍などに対する高度の医療を完遂するためにも求められる支持療法ともいえよう．そのためさまざまな医療現場で多職種が活動しているが，口腔機能管理を効率よく，しかも質を高めるためにはニーズや役割の情報交換が重要である．本シンポジウムでは内科医師，言語聴覚士，歯科医師，歯科衛生士に登場いただき，口腔機能管理への関与について講演いただいた．すなわち，がん化学療法における口腔衛生管理の必要性や摂食・嚥下リハビリテーションの一環としての口腔機能の改善が必要条件であること，あるいは重症難症例のQOL改善における口腔衛生管理の意義などが示された．まさに，多職種による講演を通じて口腔機能管理の範囲の広さと必要性を再認識することができた．そして，機能の異なるさまざまな病院から多職種の参加する本学会においてこそ，口腔機能に関するシンポジウムは有意義であったと実感できた．

キーワード　口腔機能管理，口腔ケア，QOL，多職種

はじめに

本シンポジウムの座長を務めた著者らが大学を卒業した頃は，歯を磨くことは歯垢を除去して，う蝕や歯周疾患の罹患を予防あるいは進行を抑制するためと教えられていた．もちろん，今でも歯を磨いて口の中をきれいにすることは，歯を長く健康に使うための必要条件であることには変わりない．事実，その啓発効果によって本邦における児童のう歯罹患率は著しく低下し，多くの歯を健康に維持している高齢者も増えてきた．さらに残存歯数が多いこと，すなわち自分の歯で咀嚼できることは高齢者のQOLの向上に寄与することも知られるようになった．そればかりか，疫学的研究などにより口腔内を清潔に保つことは単に歯科疾患の予防のためだけではなく，全身の健康維持に有益であることが示唆されるようになった．とくに口腔ケアの介入により口腔内を清潔にすることで介護施設入所者の発熱の頻度が減ることを示した報告[1]は，エポックメイキング的であったといえよう．この報告が原動力となり，入院患者や施設入所者などにおいて口腔内の保清の大切さが広く認識されるようになったと思われ

国立病院機構名古屋医療センター　歯科口腔外科，＊国立病院機構大阪医療センター　歯科口腔外科　†歯科医師
著者連絡先：宇佐美雄司　国立病院機構名古屋医療センター　歯科口腔外科　〒460-0001　名古屋市中区三の丸四丁目１－１
e-mail：usami.takeshi.fy@mail.hosp.gp.jp
（2020年５月７日受付，2020年９月11日受理）
Management of Oral Function Supported by Multi-medical Occupations
Usami Takeshi and *Takumi Arika, Dept. of oral and maxillofacial surgery NHO Nagoya Medical Center, ＊NHO Osaka Medical Center
(Received May 7, 2020, Accepted Sep. 11, 2020)
Key Words：management of oral function, oral care, QOL, multi-medical occupations

る．そして，この頃より「口腔ケア」という言葉が普通に使用されるようになり，医療の表舞台に登場してきたが，実際の口腔ケアは歯科医療従事者よりむしろ看護の現場のほうに活性があったようである．そもそも「ケア」の一環として自然発生的であったためかもしれないが，歯科診療報酬項目にほとんど該当するものがなかったことから口腔を診療対象としている歯科医療従事者側は消極的であった．しかし，2012年に「周術期口腔機能管理」という全く新しい項目が歯科診療報酬算定に導入されたことにより状況は変わった．対象疾患患者が限定はされていたものの，これにより医科歯科が協働して口腔衛生や口腔機能の保持管理を行うことに診療報酬算定が可能になったのである．さらに最近では歯科医師が栄養サポートチームの一員として参加することにより，入院栄養指導料に加算がつくようになった．このように医療の中で口腔機能管理の重要性が一層明確となり，多職種が関与するものと解釈されるようになった．

今では口腔機能管理は，歯科治療を含めた専門的口腔衛生管理と口腔ケアを包括したものと理解している．しかしながら，個々の職種における認識あるいは活動内容についての情報交換は必ずしも十分ではなかったと思われる．そこで，このシンポジウムではさまざまな職種がどのような考えを持ち，どのように活動しているかを披露していただくことにより，よりよい口腔機能管理を実践するために認識の共有をはかることを目的として企画した．

各シンポジストの講演内容

第１席では京都医療センターの呼吸器内科医師の三尾直士氏にお願いした．口腔ケアと呼吸器系臓器との関わりは，とくに誤嚥性肺炎の予防の観点からよく知られているが，今回の講演では肺がん治療における口腔機能管理の必要性を解説いただいた．講演の要旨を紹介する．

肺がんは罹患頻度が高く，しかも今でも予後が不良で最も死亡者数が多いがんである．初診時に進行例が多く，しかも骨転移の頻度も高い．そのため，化学療法が重要な位置を占め，骨吸収抑制薬もしばしば使用される．まず，化学療法として使用される薬剤には殺細胞的抗がん剤，分子標的治療剤，免疫チェックポイント阻害剤がある．よって肺がん診療における口腔ケアの目的としては １．殺細胞的抗がん剤の使用時における感染症の予防 ２．分子標的治療剤治療における口腔粘膜保護 ３．骨修飾薬の使用時における口腔衛生が挙げられる．

免疫チェックポイント阻害剤の登場により肺がんの生命予後が改善されるに連れ，骨吸収抑制薬の使用も増加し副作用である顎骨壊死の問題もより一層注目されるようになった．さらに，今後の課題として免疫チェックポイント阻害剤の効果と口腔内細菌叢との関連も推測されているとのことであった．今後，歯科医療従事者としてその知見に関心を持っていきたい．

第２席では名古屋医療センターの言語聴覚士，水野早氏にお願いした．講演の要旨は次のとおりである．

言語聴覚士は聞く・話す・読む・書くなどのコミュニケーション能力や摂食嚥下の諸問題に対して評価・訓練・指導を行う．その中でも口腔は構音・摂食嚥下・味覚などさまざまな機能を有するため重点的にアプローチすることが多い．すなわち，口腔ケアや正しく義歯を装着することは摂食嚥下訓練・構音訓練のスタートであり基礎訓練の一つでもある．口腔機能管理が早期から順調に進む症例では明瞭な発声構音を可能にし，直接嚥下訓練や食事開始へと移行できることが多い．やはり，口腔機能管理はQOLの向上に重要であることを示された．

後半の講師は歯科医療関係者にお願いした．つまり，口腔疾患を直接治療にあたる側からの口腔機能管理に対する関与をお話しいただいた．まず，福岡東医療センター歯科口腔外科の吉田将律先生が前任の九州医療センターにおいて，NSTのメンバーに加わり活動してきた経験を紹介いただいた．九州医療センターでは摂食嚥下内視鏡検査（VE）を実施しSTと摂食嚥下リハビリについて検討したりした．また，NST回診を通じて，食事形態の選択や補助食品の追加による栄養量の調整を栄養士と共に行ってきた．当然ながら，口腔の専門家である歯科医師として看護師等に口腔衛生管理について指導的に助言，指示するなどの機会も増えた．従来の歯科，とくに口腔外科診療の枠組みから踏み出るように口腔機能管理に大いに貢献できたとのことである．そして，この活動により病院内全体の認識の共有に繋（つな）がったとのことであった．

最後は国立国際医療研究センター病院で歯科衛生士として勤務してみえる近藤順子氏にご登壇いただいた．よく知られているように同院はHIV感染症/

AIDS診療の総本山である．それ以外にも多くの難治性疾患を扱うため，さまざまな症例の口腔ケアの対応が求められ困難な事例に遭遇することもまれではない．しかしながら，専門的口腔ケアにより少なからずQOLの改善に寄与できることの具体例を提示された．そして，日々の歯科口腔外科診療従事の合間を縫って，緩和医療などにおける口腔ケアの必要性を啓発する活動にも携わることでの充実感を述べられた．

ま と め

今回のシンポジウムでは「口腔機能管理」をキーワードとして，4つの職種の方々に登場いただいた．残念ながら，シンポジウムの時間的制約もあり相互の踏み込んだ議論にまでは至ることはできなかったが，それぞれの立場から「口腔機能管理」について有意義なお話をいただくことができた．

三尾氏の講演から，今後，多くの診療科の医師に「口腔機能管理」の理解が進むものと心強く思った．同時に歯科医療従事者としてはがん化学療法などにおいて，口腔機能管理の研鑽，向上が強く求められていくと再認識するものであった．また，摂食・嚥下リハビリテーションにおいては職種相互の情報交換が大切であり，あるいは歯科診療にとってもVEの実施が有用であることが理解できた．まさに，口腔機能管理の範囲の広さと必要性多様性を再認識することができたわけである．そして，機能の異なる複数の病院から多職種の参加する本学会において，口腔機能に関するシンポジウムは有意義であったと帰結し締めくくりとした．

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし．

［文献］

1）Yoneyama T，Yoshida M，Matsui T et al. Oral care and pneumonia. Oral Care Working Group. Lancet 1999；**354**：515.